迷葉伴葉花花

四紅露一鏡蘆

亭崎田口　富

葉

二尾幸樋泉徳

幸田　露伴・樋口一葉
泉　　鏡花・徳富蘆花

新潮社版

日本文学全集　1

二葉亭四迷・尾崎紅葉
幸田　露伴・樋口一葉
泉　　鏡花・徳富蘆花

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／石福印刷株式会社　製本所／大進堂製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1967

目次

二葉亭四迷　浮雲　七
尾崎紅葉　心の闇　一四五
幸田露伴　五重塔　一八七

樋口一葉
にごりえ　二四九
十三夜　二七一
たけくらべ　二八五
泉鏡花
高野聖　三一九
歌行燈　三六五
徳富蘆花

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

自然と人生　四一三
灰燼　四一四
自然に対する五分時　四三三
写生帖　四五八
湘南雑筆　四八五
風景画家コロオ　五一九
注解　五三一
年譜　五五九
解説　吉田精一　五六九

二葉亭四迷

浮雲

浮雲はしがき

薔薇の花は頭に咲いて活人は絵となる世の中独り文章而已は黴の生えた陳腐翰の四角張りたるに頬返しを附けかね又は舌足らずの物言を学びて口に涎を流すは拙し是はどうでも言文一途の事だと思立っては矢も楯もなく文明の風改良の熱一度に寄せ来るどさくさ紛れお先真闇三宝荒神さまと春のや先生を頼み奉り欠硯に朧の月の雫を受けて墨摺流す空のきおい夕立の雨の一しきりさらさらさっと書流せばアラ無情始末にゆかぬ浮雲めが艶しき月の面影を思い懸なく閉籠て黒白も分かぬ烏夜玉のやみらみっちゃな小説が出来しぞやと我ながら肝を潰して此書の巻端に序するものは

明治丁亥初夏　　二葉亭四迷

第一編

第一回　アアラ怪しの人の挙動

千早振る神無月も最早跡二日の余波となった二十八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうようよぞよぞよ沸出でて来るのは、孰れも顕を気にし給う方々。しかし熟々見て篤と点撿すると、是れにも種々種類のあるもので、まず髭から書立てれば、口髭、頬髯、顕の鬚、暴に興起した拿破帝髭に、狆の口めいた比斯馬克髭、そのほか矮鶏髭、貂髭ありやなしやの幻の髭と、濃くも淡くもいろいろに生分る。髭に続いて差いのあるのは服飾。白木屋仕込みの黒物ずくめには仏蘭西皮の靴の配偶はありうち、之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしという。是れより降っては、背黴よると枕詞の付く「スコッチ」の背広にゴリゴリするほどの牛の毛皮靴、そこで踵にお飾を絶さぬ所から泥に尾を曳く亀甲洋袴、いず

れも釣しんぼうの苦患を今に脱せぬ貌付、デモ持主は得意なもので、髭あり服あり我また奚をか覓めんと済した顔色で、火をくれた木頭と反身ッてお帰り遊ばす、イヤお羨しいことだ。其後より続いて出てお出でなさるは孰れも胡麻塩頭、弓と曲げても張の弱い腰に無残や空弁当を振垂げてヨタヨタものでお帰りなさる。さては老朽しても流石はまだ職に堪えるものか、しかし日本服でも勤められるお手軽なお身の上、さりとはまたお気の毒な。

途上人影の稀れに成った頃、同じ見附の内より両人の少年が話しながら出て参った。一人は年齢二十二三の男、顔色は蒼味七分に土気三分、どうも宜敷ないが、秀た眉に儼然とした眼付で、ズーと押徹った鼻筋、唯惜哉口元が些と尋常でないばかり。しかし締はよさそうゆえ、絵草紙屋の前に立っても、パックリ開くなどという気遣いは有るまいか。兎に角顎が尖って頬骨が露れ、非道く癯れている故か顔の造作がとげとげしていて、愛嬌気といったら微塵もなし。醜くはないが何処ともなくケンがある。背はスラリとしているばかりで左而已高いという程でもないが、痩肉ゆえ、半鐘なんとやらという人聞の悪い渾名に縁が有りそうで、年数物ながら摺畳皺の存じた霜降「スコッチ」の服を身に纏ッて、紐組を鰐帯にした帽檐広な黒羅紗の帽子を戴いていい、今一人は、前の男より二ツ三ツ見らしく、中肉中背で色白の丸顔、口元の尋常な所から眼付のパッチリとした所は仲々の好男子ながら、顔立がひねてこせこせしているので、何となく品格のない男。黒羅紗の半「フロックコート」に同じ色の「チョッキ」、洋袴は何か乙な縞羅紗で、リュウとした衣裳附、縁の巻上ッた釜底形の黒の帽子を眉深に冠り、左の手を隠袋へ差入れ、右の手で細々とした杖を玩物にしながら、高い男に向い、

「しかしネ！、若し果して課長が我輩を信用しているなら、蓋し已むを得ざるに出でたんだ。何故と言って見給え、局員四十有余名と言やア大層のようだけれども、皆腰の曲ッた老爺に非ざれば気の利かない奴ばかりだろう。其内で、こう言やア可笑しい様だけれども、若手でサ、原書も些たア嚙っていてサ、而して事務を取らせて捗の往く者と言ったら、マア我輩二三人だ。だから若し果して信用しているのなら、已むを得

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ないのサ」

「けれども山口を見給え、事務を取らせたら彼の男程捗の往く者はあるまいけれども、矢張免を喰ったじゃアないか」

「彼奴はいかん、彼奴は馬鹿だからいかん」

「何故」

「何故と言って、彼奴は馬鹿だ、課長に向って此間のような事を言う所を見りゃア、弥馬鹿だ」

「あれは全体課長が悪いサ、自分が不条理な事を言付けながら、何にもあんなに頭ごなしにいうこともない」

「それは課長の方が或は不条理かも知れぬが、しかし苟も長官たる者に向って抵抗を試みるなぞというなア、馬鹿の骨頂だ。まず考えて見給え、山口は何んだ、属吏じゃアないか。属吏ならば、仮令い課長の言付を条理と思ったにしろ思わぬにしろ、ハイハイ言って其通り処弁して往きゃア、職分は尽きてるじゃアないか。然るに彼奴のように、苟も課長たる者に向ってあんな差図がましい事を……」

「イヤあれは指図じゃアない、注意サ」

「フム乙う山口を弁護するネ、矢張同病相憐れむのか、アハアハアハ」

高い男は中背の男の顔を尻眼にかけて口を鉗んで仕舞ったので談話がすこし中絶れる。錦町へ曲り込んで二ツ目の横町の角まで参った時、中背の男は不図立止って、

「ダガ君の免を喰ったのは、弔すべくまた賀すべしだぜ」

「何故」

「何故と言って、君、是れからは朝から晩まで情婦の側にへばり付いている事が出来らアネ。アハアハアハ」

「フフフン、馬鹿を言給うな」

ト高い男は顔に似気なく微笑を含み、さて失敬の挨拶も手軽るく、別れて独り小川町の方へ参る。顔の微笑が一かわ一かわ消え往くにつれ、足取も次第々々に緩かになって、終には虫の這う様になり、悄然と頭をうな垂れて二三町程も参った頃、不図立止りて四辺を回顧し、駭然として二足三足立戻って、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階家へ這入る。一所に這入ッて見よう。

高い男は玄関を通り抜けて縁側へ立出ると、傍の坐

舗の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、チョンボリとした摘ッ鼻と、日の丸の紋を染抜いたムックリとした頬とで、その持主の身分が知れるという奴が、ヌット出る。

「お帰りなさいまし」

といって、何故か口舐ずりをする。

「叔母さんは」

「先程お嬢さまと何処らへか」

「そう」

ト言捨てて高い男は縁側を伝って参り、突当りの段梯子を登って二階へ上る。玆処は六畳の小坐舗、一間の床に三尺の押入れ付、三方は壁で唯南ばかりが障子になッている。床に掛けた軸は隅々も既に虫喰んで、床花瓶に投入れた二本三本の蝦夷菊は、うら枯れて枯葉がち。坐舗の一隅を顧みると古びた机が一脚据え付けてあッて、筆、ペン、楊枝などを摑挿しにした筆立一個に、歯磨の函と肩を比べた赤間の硯が一面載せてある。机の側に押立てたは二本立の書函、是には小形の爛缶が載せてある。机の下に差入れたは縁の欠けた火入、是れには摺附木の死体が横ッている。其外坐舗一杯に敷詰めた毛団、衣紋竹に釣るした袷衣、柱の釘に懸けた手拭、いずれを見ても皆年数物、その証拠には手擦れていて古色蒼然たり、だが自ら秩然と取旁付いている。

高い男は徐かに和服に着替え、脱棄てた服を畳みかけて見て、舌鼓を撃ちながら其儘押入へへし込んで仕舞う。所へトバクサと上ッて来たは例の日の丸の紋を染抜いた首の持主、横巾の広い筋骨の逞しい、ズングリ、ムックリとした生理学上の美人で、持ッて来た郵便を高い男の前に差置いて、

「アノー先刻此郵便が」

「ア、そう、何処から来たんだ」

ト郵便を手に取って見て、

「ウー、国からか」

「アノネ貴君、今日のお嬢さまのお服飾は、ほんとにお目に懸け度いようでしたヨ。まずネ、お下着が格子縞の黄八丈で、お上着はパッとした宜引縞の糸織で、お髪は何時ものイボジリ捲きでしたがネ、お掻頭は此間出雲屋からお取んなすったとんな」

と故意々々手で形を拵らえて見せ、

「薔薇の花掻頭でネ、それはそれはお美しゅう御座いましたヨ……私もあんな帯留が一ツ欲しいけれども……」と些し塞いで

「お嬢さまはお化粧なんぞはしないと仰しゃるけれども、今日はなんでも内々で薄化粧なすッたに違いありませんヨ。だってなんぼ色がお白いってあんなに……私も家にいる時分は是れでもヘタクタ施けたもんでしたがネ、此家へ上ッてからお正月ばかりにして不断は施けないの、施けてもいいけれども御新造さまの悪口が厭ですワ、だって何時かもお客様のいらッしゃる前で、『鍋のお白粉を施けたとこは全然炭団へ霜が降ッたようで御座います』ッて……余りじゃア有りませんか、ネー貴君、なんぼ私が不器量だッて余りじゃアありませんか」

ト敵手が傍にでもいるように、真黒になってまくしかける。高い男は先程より、手紙を把ッては読みかけ読みかけてはまた下へ措きなどして、さも迷惑な体、此時も唯「フム」と鼻を鳴らした而已で更に取合わぬゆえ、生理学上の美人は左なくとも罅壊れそうな両頬をいとど膨脹らして、ツンとして二階を降りる。其後姿を目送ッて高い男はホット顔、また手早く手紙を取上げて読下す、その文言に

一筆示しまいらせ候、さても時こうがら日増しにお寒う相成り候えども御無事にお勤め被成候や、それのみあんじくらしまいらせ候、母事も此頃はめっきり年をとり、髪の毛も大方は白髪になるにつき心まで愚痴に相成候と見え、今年の晩には御地へ参られるとは知りつつも、何とのう待遠にて、毎日ひにち指のみ折暮らしまいらせ候、どうぞどうぞ一日も早うお引取下され度念じまいらせ候、さる二十四日は父上の……

と読みさして覚えずも手紙を取落し、腕を組んでホット溜息。

第二回　風変りな恋の初峰入　上

高い男と仮に名乗らせた男は本名を内海文三と言ッて静岡県の者で、父親は旧幕府に仕えて俸禄を食だ者で有ッたが、幕府倒れて王政古に復り時津風に靡かぬ民草もない明治の御世に成ッてからは、旧里静岡に蟄居して暫らくは偷食の民となり、為すこともなく昨日

と送り今日と暮らす内、坐して食えば山も空しの諺に漏れず、次第々々に貯蓄の手薄になる所から足掻き出したが、偖木から落ちた猿猴の身というものは意久地の無い者で、腕は真陰流に固ッていても鋤鍬は使えず、口は左様然らばと重く成ッていて見れば急にはヘイの音も出されず、といって天秤を肩へ当るも家名の汚れ外聞が見ッとも宜くないというので、足を擂木に駈廻ッて辛くして静岡藩の史生に住込み、ヤレ嬉しやと言ッた所が腰弁当の境界、なかなか浮み上る程には参らぬが、デモ感心には多くも無い資本を斉まずして一子文三に学問を仕込む。まず朝勃然起る、弁当を背負わせて学校へ出して遣る、帰ッて来る、直ちに傍近の私塾へ通わせると言うのだから、あけしい間がない。迚も余所外の小供では続かないが、其処は文三、性質が内端だけに学問には向くと見えて、余りしぶりもせずして出て参る。尤も途に蜻蛉を追う友を見てフト気まぐれて遊び暮らし、悄然として裏口から立戻ッて来る事も無いではないが、其は邂逅の事で、ママ大方は勉強する。其内に学問の味も出て来る、サア面白くなるから、昨日までは督責されなければ取出さなかッた書物をも今日は我から繙くようになり、随ッて学業も進歩するので、人も賞讃せば両親も喜ばしく、子の生長に其身の老ゆるを忘れて春を送り秋を迎える内、文三の十四という春、待ちに待った卒業も首尾よく済んだのでヤレ嬉しやという間もなく、父親は不図感染した風邪から余病を引出し、年比の心労も手伝ってドット床に就く。薬餌、呪、加持祈禱と人の善いと言う程の事を為尽して見たが、さて験も見えず、次第々々に頼み少なに成って、遂に文三の事を言い死に果敢なく成って仕舞う。生残った妻子の愁傷は実に比喩を取るに言葉もなくばかり、「嗟矣幾程歎いても仕方がない」トいう口の下からツイ袖に置くは泪の露、漸くの事で空しき骸を菩提所へ送りて荼毘一片の烟と立上らせて仕舞う。さて挿人が没してから家計は一方ならぬ困難、薬礼と葬式の雑用とに多くもない貯叢をゲッソリ遣い減らして、今は残り少なになる。デモ母親は男勝りの気丈者、貧苦にめげない煮焚の業の片手間に一枚三厘の襤衣を縫けて、身を粉にして挿了ぐに追付く貧乏もないか、如何か斯うか湯なり粥なりを啜って、公債の利の細い烟を立てている。文三は父親の存生中より、家計の困

難に心附かぬでは無いが、何と言ってもまだ幼少の事、何時までも其で居られるような心地がされて、親思いの心から、今に坊が彼して斯うしてと、年齢には増せた事を言い出しては両親に袂を絞らせた事は有っても、又何処ともなく他愛のない所も有って、浪に漂う浮草の、うかうかとして月日を重ねたが、父の死後便のない母親の辛苦心労を見るに付け聞くに付け、小供心にも心細くもまた悲しく、始めて浮世の塩が身に浸みて、夢の覚たような心地。是れからは給事なりともして、母親の手足にはならずとも貴めて我口だけはとおもう由をも母に告げて相談をしていると、捨てる神あれば助くる神ありで、文三だけは東京に居る叔父の許へ引取られる事になり、泣の泪で静岡を発足して叔父を便って出京したは明治十一年、文三が十五に成った春の事とか。

叔父は園田孫兵衛と言いて、文三の亡父の為めには実弟に当る男、慈悲深く、憐ッぽく、加之も律義真当の気質ゆえ、人の望けも宜いが、惜哉些と気が弱すぎる。維新後は両刀を矢立に替えて、朝夕算盤を弾いては見たが、慣れぬ事とて初の内は損毛ばかり、今日に明日にと喰込んで、果は借金の淵に陥まり、如何しようと斯うしようと足掻き蹌いている内、不図した事から浮み上って、当今では些とは資本も出来、地面をも買い、小金をも貸付けて、家を東京に持ちながら、其身は浜のさる茶店の支配人をしている事なれば、左而已富貴と言うでもないが、まず融通のある活計。留守を守る女房のお政は、お摩りからずるずるの後配、歴とした士族の娘と自分ではいうが……チト考え物。しかし兎に角、如才のない、世辞のよい、地代から貸金の催促まで家事一切独で切って廻る程あって、万事に抜目のない婦人。疵瑕と言ッては唯大酒飲みで、浮気で、加之も針を持つ事がキツイ嫌いというばかり、さしたる事もないが、人事はよく言いたがらぬが世の習い、「彼婦人は裾張蛇の変生だろう」ト近辺の者は影人形を使うとか言う。夫婦の間に二人の子がある。姉をお勢と言ッて、其頃はまだ十二の蕾、弟を勇と言ッて、是れもまた袖で鼻汁拭く湾泊盛り（是れは当今は某校に入舎していて宅には居らぬので）、トいう家内ゆえ、叔母一人の機に入ればイザコザは無いが、さて文三には人の機嫌気褄を取る抔という事は出来ぬ。唯心ばかり

は主とも親とも思ッて善く事えるが、気が利かぬと言ッては睨付けられる事何時も何時も、其度ごとに親の難有サが身に染み骨に耐えて、袖に露を置くことは有りながら、常に自ら叱ッてジット辛抱、使歩行きをする暇には近辺の私塾へ通学して、暫らく悲しい月日を送ッている。ト或る時、某学校で生徒の召募があると塾での評判取り取り、聞けば給費だという。何も試しだと文三が試験を受けて見た所、幸いにして及第する、入舎する、ソレ給費が貰える。昨日までは叔父の家とは言いながら食客の悲しさには、追使われたうえ気兼苦労而已をしていたので、今日は外に掣肘る所もなく、心一杯に勉強の出来る身の上となったから、ヤ喜んだの喜ばないのとそれはそれは、雀躍までして喜んだが、しかし書生と言ッても是もまた一苦界、固より余所外のおぼッちゃま方とは違い、親から仕送りなどという洒落はないから、無駄遣いとては一銭もならず、また為ようとも思わずして、唯一心に、便のない一人の母親の心を安めねばならぬ、世話になった叔父へも報恩をせねばならぬ、と思う心より、寸陰を惜んでの刻苦勉強に学業の進みも著るしく、何時の試験にも一番と言ッて二番とは下らぬ程ゆえ、得難い書生と教員も感心する。サアそうなると傍が喧ましい。放蕩と懶惰とを経緯の糸にして織上ったおぼッちゃま方が、不負魂の妬み嫉みからおむずかり遊ばすけれども、文三は其等の事には頓着せず、独りネビッチョ*除け物と成ッて朝夕勉強三昧に歳月を消磨する内、遂に多年螢雪の功が現われて一片の卒業証書を懐き、再び叔父の家を東道*とするように成ッたからまず一安心と、其れより手を替え品を替え種々にして仕官の口を探すが、さて探すとなると無いもので、心ならずも小半年ばかり燻ッている。其間始終叔母にいぶされる辛らさ苦しさ、初は叔母も自分ながらけぶそうな貌をして、やわやわ吹付けていたからまず宜ッたが、次第にいぶし方に念が入ッて来て、果は生松葉に蕃椒をくべるように成ッたから、其のけぶいこと此上なし。文三も暫らくは鼻をも潰していたれ、竟には余りのけぶさに堪え兼て噎返る胸を押鎮めかねた事も有ッたが、イヤイヤ是れも自分が不甲斐ないからだと、思い返してジット辛抱。そういう所ゆえ、其後或人の周旋で某省の准判任御用係となッた時は天へも昇る心地がされて、ホッと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong